

‘青花雲龍文「春寿」瓶’考

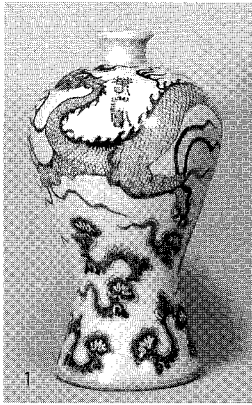

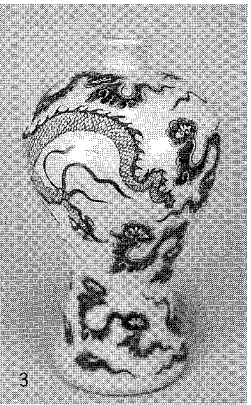

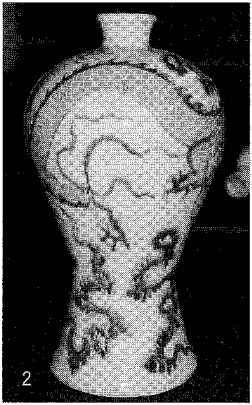
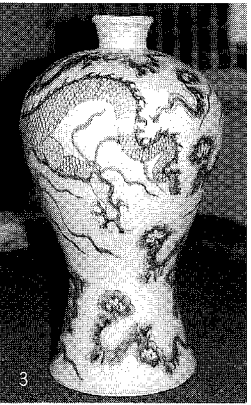

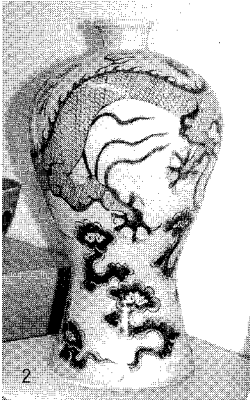

長谷川祥子

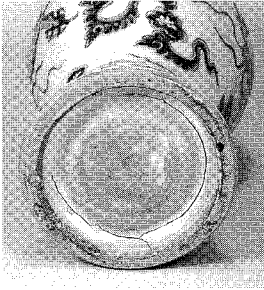


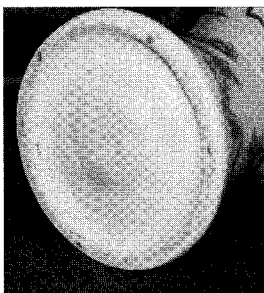


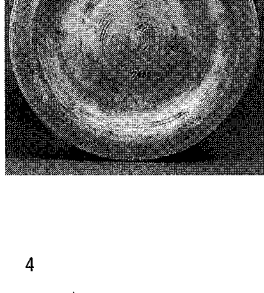
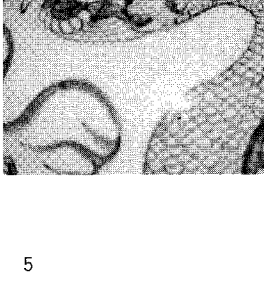
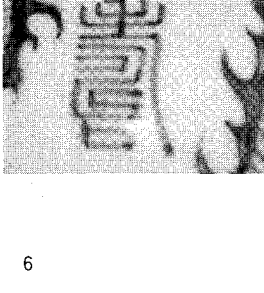
はじめに

雲龍文を描き、肩部に「春寿」の篆書銘を記す青花（染付）瓶が、世界に数点知られている。大阪市立東洋陶磁美術館、中国・上海博物館、英国・グラスゴー美術館のバーレル・コレクション（Glasgow Museums, The Burrell Collection）に各1点ずつ所蔵されている計3点と〈図表1〉、中国には個人蔵の類品もう1点があるという¹⁾。瓶はいずれも小さな口部を頂上につけ、肩が外に張り出したのち胴部が明瞭にすぼまり、裾に向けてまた幅を広げるという特殊なフォルムをもつ「梅瓶」の一種である。‘青花雲龍文「春寿」瓶’とも呼ばれているこの青花磁器は、中国の元時代末—明時代初期、14世紀中葉—後半に景德鎮で制作されたことが、ほぼ確実視されているが、元時代末、明時代初いずれの時期の作品としても、五爪龍とともに「春寿」という文字が篆書体で記されているのは大変珍しく²⁾、本作は特別に制作された青花磁器であるとみられる。現在、研究者の見解ではこれらの瓶の製作時期について明初・洪武（1368—98）とする説が有力になってきている。その背景として、1976年に報告された南京洪武宮址出土の「青花印花雲龍文盤」〈図1-a、b〉「紅彩雲龍文盤」〈図2〉と、この青花雲龍文「春寿」瓶の、龍文の形姿や雲文の描き方の近似が、指摘されるようになったことがあげられる。そしておそらくは、1987年に発表された上海博物館・汪慶正氏の‘洪武瓷’の論考によって、これらの出土資料や伝世品が検討され、青花雲龍文「春寿」瓶が「洪武瓷」とすべき特徴をもつと考証されたことが大きかったであろう³⁾。

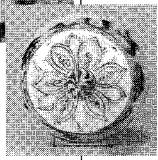
本稿では、文様および器形からの考察、具体的には元—明初期の他の作例

図表1 青花雲龍文「春寿」瓶3点の比較

	〈正面〉	〈側面1〉	〈側面2〉
<p>A 大阪市立東洋陶磁美術館 高36・6cm</p>	 <p>1</p>	 <p>2</p>	 <p>3</p>
<p>B グラスゴー美術館 高36・7cm</p>	 <p>1</p>	 <p>2</p>	 <p>3</p>
<p>C 上海博物館 高37・0cm</p>	 <p>1</p>	 <p>2</p>	 <p>3</p>

〈底裏〉	〈龍の顔〉	〈「春寿」銘〉
		
4	5	6
		
4	5	6
		
4	5	6

〈蓋〉



との比較作業によって青花雲龍文「春寿」瓶（以下「春寿」瓶と称す）の製作された時期を考えることを主たる目的とする。筆者は幸いにもこれら3点について実見し、そのうち上海博物館のものを除く2点を調査、観察する機会を得た。さらには近年、生産地である景德鎮窯址における発掘調査も元一明初の遺構においてめざましく、展覧会や多くの写真資料から考察する機会が与えられている。それゆえ、本稿ではこれらから得られた知見をもとに論を進めていくが、まず現存する3点の「春寿」瓶の形式分析から始めることにする。そしてこの作品を理解するのに不可欠であると思われる「春寿」の語の意味についても、宗教とのかかわりという視点から考察を行ないたい。

1、「春寿」瓶の年代観について

青花雲龍文「春寿」瓶の具体的な製作時期については、この作品が世に知られて以降、様々に推定され判じられてきたものの、未だ定説は存在していない。それはおそらく、描かれているのが主文様である龍および雲文様だけで、製作年代の決定に重要な手がかりを与えてくれる副次的文様がないこと、そしてこの瓶が元一明初期の景德鎮製品において特異な器形であることにもよるであろう。にもかかわらず、これまで研究者たちの興味を引き付けてきたのは、これが五爪龍を描く官窯スタイルの製品であることと、器面に篆書体で記された「春寿」の意味を解明したいとする意識が、強かったからだと推測される。

最初に「春寿」瓶を注目すべき作品であるとして論文に取り上げたのは、おそらく米国のリー（Jean Gordon Lee）氏であり、1952年のことであった⁴⁾。氏は、グラスゴー、パーレル・コレクションの「春寿」瓶（以下「グラスゴー「春寿」瓶」とも記す）と、現在大阪東洋陶磁美術館が所蔵する「春寿」瓶（以下「大阪「春寿」瓶」とも記す）を一对とみなして、「この瓶に備わるすべての特性から、14世紀の作」とし、さらに雲文の形式に注目することで、製作時期を「14世紀前半」と考証した。

この説を受けて、フリーヤー・ギャラリーのポープ（John Alexander Pope）

氏は1956年、中近東のイラン・アルデビル廟コレクションの中国陶磁を調査研究した大著“Chinese Porcelains from the Ardebil Shrine”⁵⁾の中で、この‘グラスゴー「春寿」瓶’ともう1点の類品、‘大阪「春寿」瓶’を「洪武(Hung-wu)」の項に取り上げている。当時はまだ一般に、洪武年間(1368-98)の作品グループ、いわゆる「洪武様式」の認定がなされていない時代であった。ポープ氏はここに、14世紀中葉に相当する「元(至正)様式」(至正年間1341-67)とも、15世紀初期の様式である、明の「永楽・宣徳様式」(永楽年間1403-24、宣徳年間1426-35)の作品とも異なる特徴を備えた、両者の中間的グループの存在—「洪武様式」を明らかにし、これらの「春寿」瓶も、それに含まれると考察した。その根拠として、「春寿」瓶の龍文が14世紀中葉の特徴を備えつつも、クラーク(Alfred Clark)氏旧蔵の皿<図3>に描かれる五爪をもつ龍文と似ていること、また瓶自体の形式が、14世紀中葉の作例にも、それ以前にも見出せないことをあげている。そして、14世紀中葉より後の製作であるとする説を提示したが、アルデビル廟所蔵の15世紀初期様式(いわゆる永楽・宣徳様式)の青花龍波濤文瓶<図4>とも(梅瓶の)形式が異なることを理由に、それより10年、もしくはそれ以上遡る作品であると推測した。1955年、ポープ氏は『世界陶磁全集11 元明篇』(河出書房)に論考を寄せ、そこでも「春寿」瓶の製作年代が洪武年間であると述べている。だが当時、日本の研究者たちは、必ずしもそれに同調しなかったようである⁶⁾。

その後わが国にポープ氏らの論文で紹介された蓋付の「春寿」瓶(現:大阪「春寿」瓶)が将来され、それを契機としてか、「春寿」瓶は日本国内の陶磁書にしばしば掲載されるようになった⁷⁾。各書における著者の見解をみてゆくと、例えば1960年刊『陶器全集11 元・明初の染付』(平凡社)において、カラー原色図版に掲載されたこの「春寿」瓶を、藤岡了一氏は「元末」もしくは「元末明初」の時代表記としている⁸⁾。1971年刊の『陶器講座7 中国Ⅲ 元・明』(雄山閣)では、佐藤雅彦氏が「永楽期」とし⁹⁾、1974年刊の『陶磁体系41 元の染付』(平凡社)では、矢部良明氏が「春寿」瓶を「元」の作例とみなした上で、このような「五爪龍文」を表す作品の一群を、元王朝の御器であると考証している¹⁰⁾。その後‘大阪「春寿」瓶’は、1985

年に大阪市立東洋陶磁美術館の『元の染付展』に出品されたが、1999年刊行の館蔵品選集『東洋陶磁の展開』では、「洪武」の作品とされている。

一方ヨーロッパでは、引き続きポープ氏の見解が支持されたようである。‘グラスゴー「春寿」瓶’を中心とする「春寿」瓶の図版を伴う紹介は、1984年、スコット (Rosemary E. Scott) 氏による、パーレル・コレクションの中国青花、釉裏紅磁器の紹介記事においてなされている¹¹⁾。その中で氏は‘グラスゴー「春寿」瓶’の製作年代を、現在は大阪市立東洋陶磁美術館に所蔵される「春寿」瓶とともに「last quarter of the 14th century, (14世紀第4四半期)」(洪武年間に相当)に位置付けている¹²⁾。

そして中国では、冒頭にもふれたとおり、上海博物館の「春寿」瓶(以下‘上海「春寿」瓶’とも記す)が、1987年刊の『青花釉裏紅』において、著者、上海博物館の汪慶正氏によって、洪武期の作品であると解説されている¹³⁾。また汪氏は同年発表の論文「明景德鎮洪武瓷述略」の中でさらに詳しくこの「春寿」瓶に言及し、口部が元代の‘梯形(台形)口部’と異なること、雲文の形式が元時代のそれと異なること、五爪をもつ龍の掌が円形をなしており、これを明代青花の特徴であるとして、以上の理由から「洪武瓷」としている。以降、現在まで上海博物館の「春寿」瓶は洪武期の作品とされている¹⁴⁾。

このように世界中で注目され、時代とともに様々な意見が提出されている「春寿」瓶の製作年代論であるが、1990年前後から基本的に洪武説が主流となってきているのが研究の現状である。

2、「春寿」瓶3点の特徴

①「春寿」瓶3点に共通する部分

〈器形〉

基本的には、小さな口部を付け、肩の張った「梅瓶」形であるが、胴部下方で「く」の字形に側面にくびれを作り、高台部分でまた広がる姿である。中国ではこれを「束腰梅瓶」と称する。蓋を伴わない瓶本体のみの寸法は、

いずれも高さが36~37cm。胴継ぎは、最もすばまった部分と、肩の最も張り出した部分より少し下の2箇所で作られている。口頸部は、上部がやや撥形に広がる筒形のものが付き、その口縁は玉縁を面取りしたように分厚く作られる。底部では、どの作品も^{たたみつき}疊付側面でわずかに釉ごと周囲を面取りされている。底裏は3点ともにすべて無釉（露胎）で、外周が1~2cm幅の疊付となって巡る圈足となり、そのすぐ内側は削られて凹む。ただし、高台内中央部は、少し盛り上がるように成形されている。

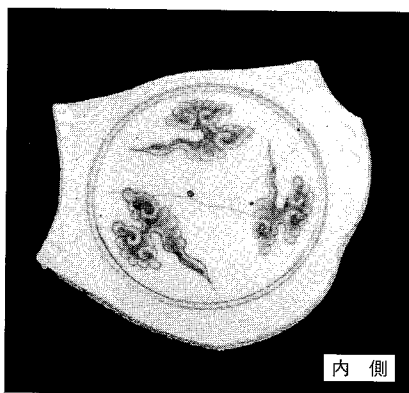
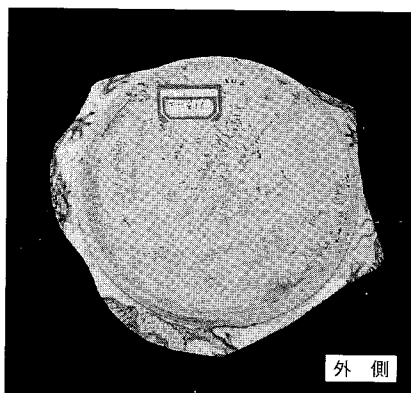
〈文様〉

器面には、一切の区画が設けられず、全体に青花で雲龍文が描かれ、瓶の肩に1箇所、篆書体で「春寿」二字が記される。肩部から胴部上方に1頭の龍が、作品の正面に向かって左方向に頭を向け、四足で空を駆けるように描かれている。春寿銘は、ちょうど龍頭に近い背の窪んだところに縦に記される。雲文が瓶の下方を中心に多数（13~18朵）配される。龍はどの瓶でも五爪で表され、丸い眼球をもち、双角、牙と髭、たてがみ、背鱗体毛（もしくは雲気文）などを付けて描かれる。雲はいわゆる^た靈芝雲（「如意頭雲」ともいう）で、その靈芝形の雲頭の中央を白抜きにし、長くモクモクと表現された雲脚とともに、コバルト顔料でグラデーションをつけて塗られている。瓶の口頸部は内外ともに無文である。

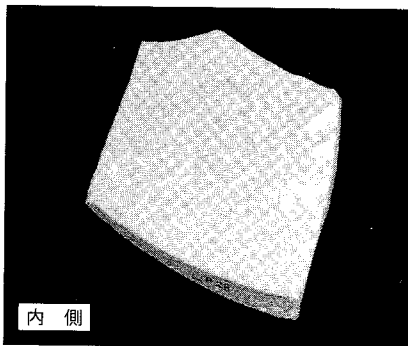
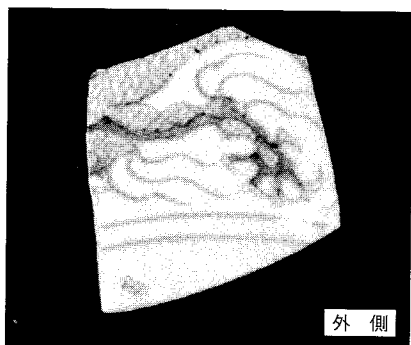
②「春寿」瓶3点の、各々の特徴

A. 大阪市立東洋陶磁美術館所蔵品 総高（蓋付）41.2cm、身高36.6cm、口径6.1cm、底径15.2cm。〈図表1・A-1-7〉

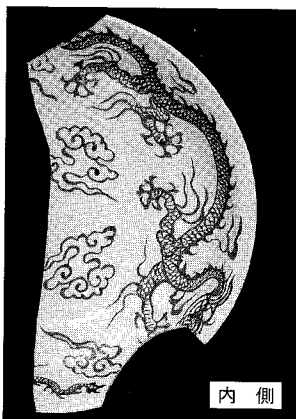
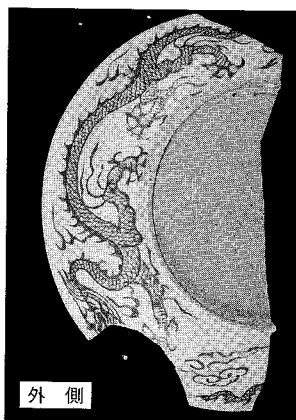
3点の「春寿」瓶のうち、唯一蓋を伴っている作品で、口頸部は他2点よりも垂直に立つ。文字を正面にした置き方で、龍文が最も高い位置に描かれるのがこの瓶である。龍や春寿銘とともに、靈芝形の頭部に脚を付ける雲がこの瓶では18朵、脚部のみの雲（小型）が5朵描かれる。透明釉は青みを帯びるが、釉調・青花の発色など、全体的な焼き上がりは本作が最も整っているとみられる。底裏の、素地の露出した大部分は透明釉がふき取られた痕であろうが、橙色を呈している。高台内の上げ底となっている部分では弧を



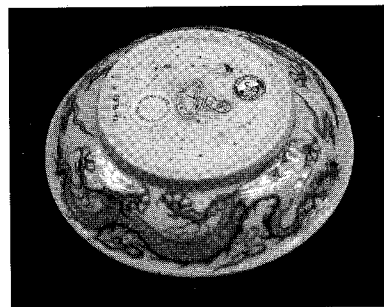
1-a 青花印花雲龍文盤（陶磁片） 南京洪武宮址出土 南京博物院藏 底徑10.5cm



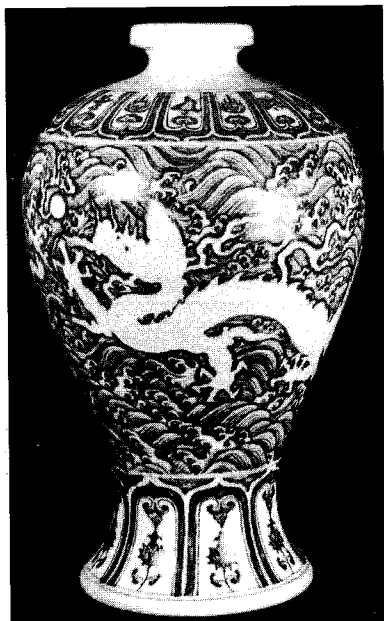
1-b 青花印花雲龍文盤（陶磁片） 南京洪武宮址出土 南京博物院藏 徑5.4×5.6cm



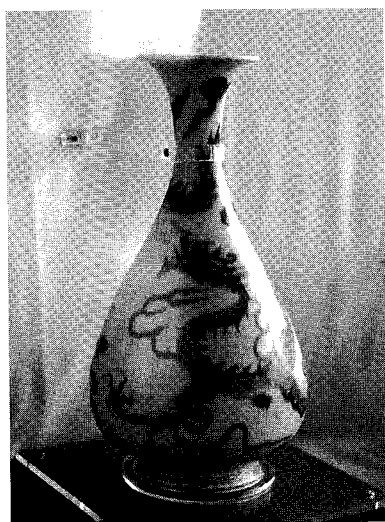
2 紅彩雲龍文盤（陶磁片） 南京洪武宮址出土 南京博物院藏 復元口徑15.6cm



3 青花印花雲龍文盤 大英博物館藏
(Alfred Clark氏寄贈) 口径15.9cm



4 青花波濤龍文瓶 アルデビル廟藏
高41.5cm



5 青花雲龍文玉壺春瓶 內蒙古翁牛特旗
出土 北京歷史博物館藏 高29.8cm



6 青花雲龍文玉壺春瓶 大英博物館藏
(Basil Gray氏寄贈) 寸法不詳

2/3周描くように、亀裂が巡る。高台の様子は、〈図表1・A-4、C-4〉に載せるように、上海「春寿」瓶と近似する。底部は1~2cm前後の幅で巡る圈足となり、高台中央部が盛り上がっている。

本作にのみ付属する青花磁器の蓋は、口頸部をすべて覆うように作られた裾広がり^{ちゆう}の被せ蓋で、頂上に宝珠形の紐（つまみ）を付けている〈図表1・A-7〉。紐の周囲は唐草文をあしらった葉文が巡り、蓋側面には雑宝文（珊瑚・盤長・繡球・丁字・角杯・陰陽板・火焰宝珠・別種の火焰宝珠）が描かれる。蓋は青料や透明釉の発色、絵付けの筆致から推しても、瓶本体の作調と近似しており、断定はしがたいが当初から一具のものであったと考えられる。元一明初の梅瓶には、完器であれば、この種の蓋が付くことが知られている。しかし「春寿」瓶の蓋の内部には、元末・江西省高安県窖蔵から出土した数々の元様式の青花梅瓶の蓋にあるような、瓶の口に挿し込んで、ずれないようにする筒状の突起は、付けられていない¹⁵⁾。

B. 英国、グラスゴー・ミュージアムス（バーレル・コレクション）所蔵品
高36.7cm、口径6.2cm、底径15.6cm。〈図表1・B-1-6〉

イギリス北西部グラスゴー市内にある、グラスゴー美術館（正式にはグラスゴー・ミュージアムス）、バーレル・コレクションに所蔵される「春寿」瓶である。この「春寿」瓶は蓋を伴わない。口は上方に向けて撥形に広がっている。高さの寸法はほぼ他2点と同じであるものの、全体のフォルムからして、本作が最もスリムであるという印象を受ける。この瓶に特徴的なのは、青みを帯びた透明釉の、釉下の青花文様が流れて滲み気味であることである。青花の発色は明るく良好であるが、「春寿」の文字はとくに滲みのため判読しにくい。その部分のコバルト顔料は、素地に食込んで見えるほどに濃い。器面に靈芝雲は15朵描かれるが、大阪「春寿」瓶、上海「春寿」瓶に所々見られるような、小型の脚部のみの雲文は見られない。また高台の様子が、他2点の「春寿」瓶と少し異なる。底の周囲を巡る暈付の幅は他2点よりも狭く、高台内は褐色の焦げも無く、白い素地が現れている。しかし、高台内の素地中央が盛り上がっているところなど、底部の基本的な作りは同じである¹⁶⁾。

C. 中国・上海博物館所蔵品 高37.0cm、口径6.2cm、底径16.2cm。〈図表

本作も蓋を伴っていない。見た目では釉は掛かりが薄いのか、さほど青みを帯びていない。コバルト顔料に染みがなく、描線が明瞭に現れているので、作品の雰囲気は他2点と比べてやや‘堅い’印象を受ける。口は上方に向けて少し撥形に広がっている。青料は、この3点のうち最も落ち着いた(暗めの)発色である。「春寿」の文字や文様はまったく染みも、顔料のダミの濃淡もなく、すっきりと端整に表されている。高台は、‘大阪「春寿」瓶’ とほぼ同様の形式で、露胎素地では淡褐色の焦げが現れている¹⁷⁾。

以上の比較を行なってみると、これら3点は特殊な造形、寸法や文様の類似から、大変近い関係にあることが理解される。おそらく‘大阪「春寿」瓶’以外の2点も本来蓋を伴っていた可能性が高い。しかし詳しく観察すると、文様の配置や、数など、幾つかの違いを指摘できることも確かである。器形では、‘大阪「春寿」瓶’の口頸部がもっとも垂直に成形されていること、高台で‘グラスゴー「春寿」瓶’のみ圈足の幅が狭く削られていることなどがあげられる。文様では、雲文の数と配置、龍の足周辺にたなびく体毛(雲気)のなびき方などに違いが認められる。靈芝雲の描き方が丁寧で変化があり、最も数多く描かれているのは‘大阪瓶’であり、雲文が大きめで、幾分少なく配されているのは‘上海「春寿」瓶’であった。

龍の体軀や顔つき、濃淡をつけて描かれた靈芝雲、春寿の篆書体など、個別に取り上げれば互いに酷似していても、実際のところ比較的自由的な絵付けである。このことから、これらの瓶は“五爪龍・雲文と春寿銘”という主題と、その主だった配置だけが決められており、それ以外は、絵付けに手馴れた、一流陶画工の裁量にまかされていたのではないかと推察される。画工は、龍と文字を描いた後、余白に心地よいバランスで、自由に雲文を配していったと想像されるのである。この作品の龍に特有の、愛嬌ある表情、体毛を勢いよく、また鱗や背鰭であれば細かくリズムカルに描く様子、雲文に表された濃淡、統一された篆書の字体など、これら「春寿」瓶3点に共通する特徴から見れば、同じ画工の手による可能性も高いであろう。そしてまず、これらが同時期の官窯製品であることは、間違いないものと考えられる。

ではこれらは、どのような用途から特別な姿・文様に詠えられ、焼成されたのであろうか。そこで次に、「春寿」の言葉の意味とともに、その製作背景の問題を考えてみることにする。

3、「春寿」の語の意味と道教

①「春寿」の意味

「春寿」の意味については、これまでも宮殿名に由来するという推定¹⁸⁾や、その言葉に祝いの酒という意味があるとの説が述べられたことがあった。前者の意見については明確な根拠がないが、後者については『詩経』「幽風・七月」の条に「為此春酒 以介眉寿」の句¹⁹⁾があることから、春寿は長寿を祝う酒という意味をもつのではないかとする意見がある。中国では“〇〇春”という呼名で銘酒を表すので、そのことから「春寿」が酒に関わると連想されるといふ²⁰⁾。そして実際梅瓶の器形であれば、酒器であった可能性が高い。だが長寿の祝い酒という一般的な意味を込めたものであるにもかかわらず、なぜ古典『詩経』よりその二字を拾ったのか、「春寿」が酒を表すものかとして、なぜ「寿春」ではなかったのかなど、依然いくらかの疑問が残る。

ところで、中国には古くから一般的な言葉として「回春長寿」という言いまわしがある。「回春」は若返り、「長寿」は長生きを意味する言葉である。また「春寿」の語そのものでも「春秋に富む」、いわゆる長寿の意味に用いられる例が明の文献には知られる²¹⁾。おそらく元末明初当時も「春寿」の語は、人々に即座に「回春長寿」の語を連想させるものではなかったかと推察される。その語はまた、不老長生に繋がる道教とかかわりの深い語であったと見られる。それは「春寿酒」という語が、滋養強壯の成分をもつ酒として存在し、またそれを服する方法として道教医薬学では、「春寿酒方」が知られているからである²²⁾。すると「回春長寿」を意味する「春寿」の語が書かれたこの瓶は、道観に寄進、もしくは道教の儀式に用いられた瓶であった可

能性もあるであろう。しかも五爪龍を描く青花磁器の精作であることから、皇帝にかかわる御器であったと考えられるのである。

②元末—明初期における道教——江南地域を中心に

モンゴル帝国・元朝に対しては、道教教団も仏教教団も、多くの場合積極的に接近し、恭順の態度をもって自集団の存続をはかろうとした。全体を見れば、モンゴル政権ではたびたび道仏論争が行なわれた結果、当時華北で影響力のあった道教の全真教や漢地仏教よりも、チベット仏教が優位に立ったことが知られているが、総じて道教は、元朝政府に厚遇された。道教界においては、全真道、太一教が華北で勢力をもち、一方華南においては、元朝が南宋を平定したのち、征服後における江南対策であったためか、江南の正一教に対して手厚い保護を与えている。これを契機として正一教と国家権力との連携が始まったといわれている²³⁾。

江西省貴溪の龍虎山を大本山とする正一教は、張を姓とする一族が代々相伝する、道教史上最も伝統ある教派とされる。五大道派のうちでは符籙派に属すといわれ、ことに中国南部では代表的な教団であった。当初は天師道といったが、元・大徳8年(1304)より正一教と称すようになる。そして元時代以降も、明、清朝を通じ、政権と結び付くようになった。元朝と結び付いて発展した正一教であったが、42代張正常は、至正21年(1361)に朱元璋(太祖洪武帝)に恭順の意を示すなど、元末動乱期より接近し、洪武元年(1368)に即位を入賀することで、「正一教主嗣漢天師大真人」の号、正二品の位と全国の道教の統括権を得るまでになった。洪武帝にとっても、教団を支配下におき、正一教の祈願招福と悪魔退散という斎醮法事(斎醮とは儀式・祭礼のこと)を行なうことは自らの意にかなうものであり、また民心を得るために必要と思われたのであろう。しかし同年の秋、洪武帝は自らが天子であるのに天に師はありえないとして、先に与えた「天師号」を「真人」に改めさせ、また度牒(官府が承認した道士などの身分証明書)の給付、僧侶や道士が自由に斎醮法事を行なうこと等の制限を加えている。とはいえ、洪武帝が忠孝の理を説く儒教を重んじ、道教にも配慮する姿勢に変わりなく、

洪武7年(1374)、洪武帝は自ら道教の齋醮の儀規を制定して全国に公布し実行させ、ときには彼自身が齋醮法事の祈禱を行なっている。これを要するに、道教に対して肅正や規制を繰り返しながらも、皇帝自らかかわりをもち続け、信奉する姿勢を示していたことが知られる。また同様の統制・干渉は、元時代チベット仏教(密教系)寄りであった仏教に対しても、漢民族従来の中国仏教に引き戻すべく行なわれている。

景德鎮の官窯製品に宗教と関係する図像や語句が表されるのは、自由に布教活動がなされたという点を重視すれば、元時代であるとするのが妥当であろう。実際、元青花の遺品には「暗八仙文」「羯鼓文」「道士像」「八宝文」といった道教や(チベット)仏教と関連する文様や造形がしばしば見受けられる。しかし、「春寿」の文字があり、蓋に八宝文もしくは暗八仙文にも共通する雑宝文を描くような官窯製品の製作年代を、元時代のみ限定することはできない。正一教が明初でも重んじられていた以上、「春寿」瓶が洪武期の作品である可能性も十分に残されているのである。

4、「春寿」瓶に類似・関連する作品との比較考察

ここで「春寿」瓶と類似点をもつ、元末、明初の景德鎮製品との比較をおこなう。

〈元時代の作品〉

- a. 北京歴史博物館所蔵、内蒙古翁牛特旗出土「青花雲龍文玉壺春瓶」(高29.8cm、口径8.4cm)〈図5〉、および大英博物館所蔵(Basil Gray氏寄贈)「青花雲龍文玉壺春瓶」(寸法不明)〈図6〉

内蒙古出土の「青花雲龍文玉壺春瓶」〈図5〉は、瓶の形式においても、出土地を考慮しても、元時代の作例とみられるが、本作は精作の部類には属さないものといえる。このようにやや粗略な絵付けで、雲龍文のみが表されている玉壺春瓶は、この他にも何点か類品が知られるが、おおよそ、駆け巡

る四爪（もしくは三爪）の龍が一頭と、そのまわりに靈芝雲が配されるという意匠である。本作は口縁内側と高台周囲は唐草文が描かれている。一方、大英博物館の「青花雲龍文玉壺春瓶」〈図6〉は、口部を欠いたものであるが、胴部に丁寧な筆致で三爪の龍と、濃淡をつけた靈芝雲を各所に描いている。胴裾に略式雲文を入れる蓮弁文を並べ、外反した高台を付ける。

以上の作品は、龍の顔つきといい、また殆どの靈芝雲の脚部に、もくもくとした突起が無いなど、「春寿」瓶とは明らかな違いがある。しかし後者の瓶には、高台近くに蓮弁文が巡るものの、2点の玉壺春瓶は元様式の青花磁器としては比較的珍らしく、ともに、器面を線などで区分していないところに、龍と靈芝雲のみの装飾を行なっている点で「春寿」瓶との類似性を指摘できる。

b. 景德鎮窯出土「青花雲龍文圀碁罐」（高11.2cm）〈図7-a〉、「青花雲龍文硯盒蓋片（半生品）」（径26.7cm）〈図7-b〉、および「青花雲龍文桶式蓋付罐」（高22.8cm）〈図8-a〉、「青花雲龍文硯盒蓋片（半生品）」（径19.9cm）〈図8-b〉

1980年代以降、景德鎮市陶瓷考古研究所では精力的な発掘調査が続けられているが、ここに取り上げたのは、その成果として発表された景德鎮官窯の出土品のごく一部である。五爪の龍文と雲文が表されている以上の出土資料は、「春寿」瓶にも近い特徴をもつ作例ではないかとみられる。景德鎮珠山北麓風景路から1988年に出土し、発掘報告者はこれを元の遺物としている²⁴⁾。これまで元時代の伝世品には殆んど知られなかった、五爪龍を描く青花磁器の作品群である。〈図7〉は龍文、〈図8〉は雲文の比較のため示した。圀碁罐に描かれた龍は、体軀、背鱗、体毛のなびく様子などが「春寿」瓶のものと似ているが、顔が異なっている。その下の図版、円形の硯盒蓋の龍も同様である。では雲文はどうかというと、桶式蓋付盒の雲文は、元・至正様式の基準作である、至正十一年（1351）銘、「青花雲龍文象耳瓶」（通称デビット瓶）〈図9〉の雲文にもよく似た、靈芝形の中央までダミで塗り暈した濃密な描き方をしている。一方、硯盒蓋の側面に見られる雲文は、かなり「春寿」瓶に似た描き方がなされている。しかし「春寿」瓶ではいずれの雲文も、その脚部において表される、もくもくと連続する小突起の一つ一つが瘤こぶのように出っ張り、膨らんでいる。この蓋〈図8-b〉の雲文は靈芝形の頭部は類



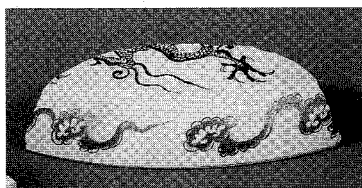
7-a



8-a



7-b

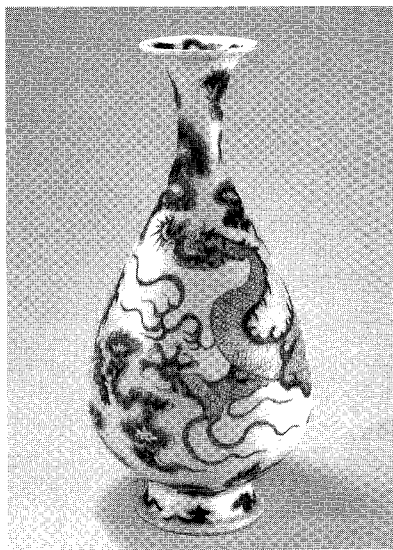


8-b

- 7-a 青花雲龍文圓蓋罐 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 高11.2cm
 7-b 青花雲龍文硯盒蓋片(半生品) 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 徑26.7cm
 8-a 青花雲龍文桶式蓋罐 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 高22.8cm
 8-b 青花雲龍文硯盒蓋片(半生品) 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 徑19.9cm



9 青花雲龍文象耳瓶(至正十一年銘) 一對
 英国·デビッド・ファンデーション藏
 高63.5cm



10 青花雲龍文玉壺春瓶 1958年 河南省樂陽市楚村、明代靜王墓出土 河南博物院藏
 高39.4cm

似するものの、その脚部において相違がある。よって、元時代景德鎮の、とくに五爪龍を伴う出土資料を概観すると、確かにそれは「春寿」瓶とよく似た特徴を備えているが、同時期の作例と実証されるほどではないと考察されるのである²⁵⁾。

〈明初・洪武期の作品〉

c. 大英博物館蔵「青花印花雲龍文盤」(口径15.9cm)〈図3〉

かつてはクラーク (Alfred Clark) 氏所蔵品として知られていた盤で、ポー氏によって「春寿」瓶との類似が指摘されたことは、既に述べた通りである。この小盤の外側には雲龍文(龍は2頭)が、内側は口縁に唐草文、見込み中央の二重円圏内に3朶の雲文が青花で描かれる。また内側面には、印花(型押し)技法で2頭の龍と雲文が表されており、精巧な作りの作品である。内側に印花で、また盤外側に巡る龍は、ともに双角五爪で表されるが、とくに後者の青花で描かれた龍と靈芝雲が、「春寿」瓶および後述する d. 河南博物院蔵「青花雲龍文玉壺春瓶」〈図10〉のそれと同じ特徴をもっている。龍の顔を観察しても、これらがかなり近似していることが認識できる。

d. 南京洪武宮址出土、「青花印花雲龍文盤・破片」(高台径10.5cm)〈図1〉および「紅彩雲龍文盤・破片」(復元口径15.6cm、高台径9.0cm)〈図2〉(ともに南京博物院蔵)

南京洪武宮址は、その造営が完了した洪武3年(1371)ごろから、靖難の変により、建文4年(1402)6月に宮殿が焼失するまで存続したと伝えられる。1964年より行なわれた明故宮玉帶河の発掘報告によると、そこに元時代以前の遺物はまったく発見されないとし、遺品は洪武年間、宮廷内で使用されていたものが中心であるとされる²⁶⁾。ここで取り上げる注目すべき出土資料は、小盤のちょうど見込み部分を残した「青花印花雲龍文盤」の陶片2つ〈図1-a・b〉で、青花と印花技法で龍文と雲文が表されているものである。盤の内側は二重円圏内に靈芝雲が3朶、周囲には印花で雲龍文が表される。暈付、高台は露胎。この作品の雲文の形式、その周囲に残る印花の龍文の特徴から²⁷⁾、完形品であればまさに c. 「青花印花雲龍文盤」〈図3〉と同様の作

品であると推察できる。靈芝雲の特徴を見ても、雲の形こそ異なるが、青花の量しの手法などに似た特徴が窺われる。英国・デビッド瓶〈図9〉の雲文よりも近いことは明らかである。つまりは、もし盤が完形品であれば、外側面に「春寿」瓶と似た龍文が描かれていたと考えられる。

一方、「紅彩雲龍文盤」の陶片〈図2〉は、薄手の白磁に紅彩で雲龍文を描いたもので、見込み中央部にc.「青花印花雲龍文盤」〈図3〉と同様の配置で3朶の靈芝雲を、側面には内外の龍文が表裏一致するように精緻な筆致で描いてあり、これも先述の「青花印花雲龍文盤・破片」やc.の盤と近似するところは多い。ちょうど龍の顔の部分が欠けており、細部の特徴が判別できないことが惜しまれるが、洪武期の作例としては珍しい、上絵付技法の官窯製品である。

ここまでの考察から、「春寿」瓶における幾つの特徴が、c.大英博物館蔵の「青花印花雲龍文盤」〈図3〉やd.洪武宮址出土「青花印花雲龍文盤・破片」〈図1-a・b〉と一致すること、そして前者c.を媒介とすることで、後者d.と同時期の製作である可能性が示唆された。これにより、「春寿」瓶の製作年代は、ほぼ洪武年間であると考えられる。

とすれば、「春寿」瓶に文様の形式などが酷似する作例、1958年に河南省滎陽市楚村、明代静王墓出土し、現在河南博物院に所蔵される「青花雲龍文玉壺春瓶」〈図10〉もまた、同時期の洪武期の作例とみなすことができるであろう²⁸⁾。器種が異なり、「春寿」銘も記されていないが、釉や青花の調子、また雲龍文様の形式すべてが「春寿」瓶と大変よく似ている。龍の、丸い眼に顎鬚をもつ顔、双角、五爪の描き方が同じであり、胸先や、右前足の脇の体毛（もしくは雲気）の‘たなびき方’などの類似も明らかである。さらに靈芝雲の描き方も同様である。龍と雲文の配置については、3点の「春寿」瓶中、‘上海「春寿」瓶’のものに最も近いと指摘できるほどである。この作例も、玉壺春瓶としては高さ40cm近くもある異例の大きさであり、何か特別の目的で製作されたものとみられる。

なお紙数の関係上、関連作品すべてについては述べられないが、洪武様式の作例とされる、南京博物館蔵の江蘇省江寧県、宋琥墓出土「釉裏紅松竹梅

文蓋付梅瓶」〈図11〉に載る蓋の形式と蓋頂上面の唐草蓮弁文装飾が（釉裏紅と青花で顔料が違うとはいえず、^{つまみ}紐に至るまで‘大阪「春寿」瓶’の蓋と極めて近似していることも指摘できる。また瓶の口部の形式は、汪氏が指摘しているとおり、洪武様式の梅瓶のように、上方をより広げた口作りとなっている。よって蓋の文様や口部の形式から考察しても、「春寿」瓶を洪武期の製作とするのが妥当であろう²⁹⁾。

以上、考察の結果をまとめてみると、元末—明初の作品資料との比較から、「春寿」瓶が器形的にも文様のにも、元時代より洪武時期の作例とより多くの共通点をもつことが理解された。しかし元時代のものとも少なからず近い関係を示すので、「春寿」瓶は洪武時期の作品とみなせるものの、元時代の青花磁器の形式もまたある程度継承している作風であると考えられる。

5、「春寿」瓶出現の背景—結びにかえて

モンゴル民族の元王朝が紅巾の乱の蜂起により、北方へ撤退すると、その中から実権を握ったのは、安徽省鳳陽の貧しい身分から立った朱元璋であった。1368年、彼は大明を建国し、年号を洪武と定める。洪武年間（1368—98）、景德鎮における青花磁器は、従来の技術を継承して製作されたとみられるが、建国当初より官窯である「御器廠」が洪武2年（1369）に設営され³⁰⁾、その製品の器形・文様については、元時代の製品と一線を画するように、厳しい規制が加えられたものと観察される。

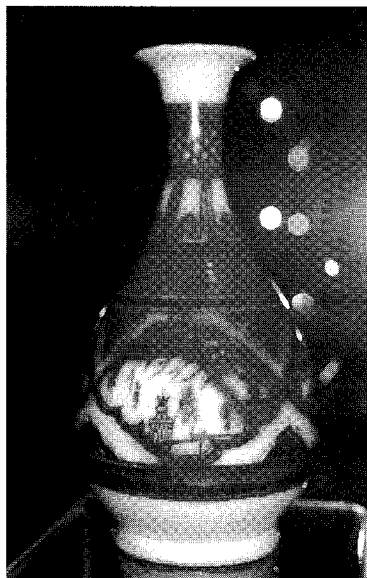
例えば、青花磁器および銅で釉下に紅色の絵文様を描く釉裏紅磁器の文様装飾において、人物・動物文様を描くことが（以下に述べる特殊な例を除いて）行なわれなくなる。またこれまで元の青花、釉裏紅磁器でかなり自由であったはずの文様の選択・採用が、菊や牡丹、蓮、桃、松竹梅、芭蕉といった植物文様の範囲に限定され、その文様のうちにも葡萄・瓜文といった西域を連想させる植物が見られなくなるなど、官窯の文様統制がかなり徹底していたことが、今日遺される作品から観察されるのである。その厳格さは器物の周縁文様（副次的文様）のデザインにおいても顕著である³¹⁾。



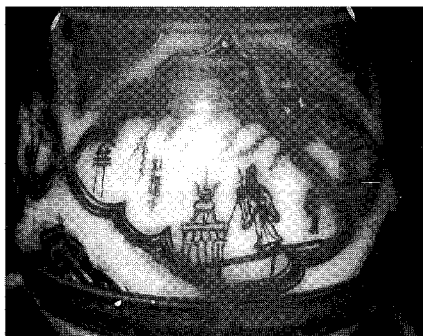
11 釉裏紅松竹梅文蓋付梅瓶 江蘇省江寧縣孫家山、明宣德宋琥墓出土 南京博物館藏 総高42.5cm



13 釉裏紅祈雨図壺 揚州文物商店藏 器高33.6cm 総高48.3cm



12-a 釉裏紅人物文玉壺春瓶 上海博物館藏 高33cm



12-b 同作品〈胴部の図〉

明初では王朝交代による社会的状況の変化も大きく、周辺諸国との交易も、明を宗主国とする朝貢貿易でしか交易が認められなかった。そのため中近東のイスラム諸国への販路が閉ざされ、輸出（下賜）先はアジア圏が中心となった。しかし一方で、それとは‘格’の違う、より上等な磁器グループが存在するようになる。器形は径15~20cm 前後の盤、碗、馬上杯など小型のものに龍文・鳳凰文などが表される作品群で、このような皇帝や高位親族を象徴するような器物は、決して海外に渡ることなく、宮中使用のために製作されたとみられる。これらの器皿は、元時代の白磁「枢府磁」³²⁾を踏襲した作調で、型押しで文様装飾する印花技法の単色釉磁、もしくはそれを併用した青花磁器、さらに当時としては特別な上絵付技法の紅彩によるものである。このグループは前章で述べた南京洪武宮址から陶片が出土しているほか、伝世品にも見られるものである。本稿で言及した「春寿」瓶は、元時代の青花磁器はもとより、洪武時期の一般的な官窯磁器（朝貢貿易用（下賜用）にも用いられる磁器）、いわゆる「洪武様式」の作品とは一線を画すものであった。五爪龍文の装飾のある磁器のうちには、洪武宮址から出土した盤などのように、宮廷内専用とされる食器のほか、おそらくは時の政府と密接にかかわりのあった、宗教的祭祀用の器が含まれている可能性もあろう。

景德鎮では元時代末に、筆彩文様を表すことができる青花、釉裏紅もしくは鉄絵技法が出現したことによって、銘文を記すことが容易にかなうこととなった。宗教的目的で器物が製作される場合、ことさら塔や樓閣など建築物を模して成形せずとも³³⁾、絵文様によってその意味を説明させる、また象徴的な言葉や銘文を記すことで、十分その役割を果たすことができたのだと思われる。元時代の釉裏紅の作例に、「彭祖焼香」の文字とともに、仙人彭祖³⁴⁾が焼香する場面、人物が煙の立つ香炉を前に祈る場面などを4つの窓内に描いた「釉裏紅人物文玉壺春瓶」（上海博物館蔵）〈図12-a・b〉がある³⁵⁾。また‘人々が日照りに苦しむところ、祈りによって龍が雷雨をもたらす図’、おそらく道教法術「神霄雷法」の様子を、胴部4つの窓内にストーリー性をもたせて描いた「釉裏紅開光祈雨図壺」（揚州文物商店蔵）〈図13〉といった作例も見られる³⁶⁾。青花技法が元時代に登場し、本格的に作られるようになってからの作例としては、著名な、デビッド・ファンデーソン蔵、青花雲

龍文象耳瓶一對〈図9〉が、道観への奉納品であったことが知られている。頸部に青花で書される銘文から、至正十一年（1351）、信州路玉山県に住む道教徒・張文進が‘当家の清吉と子女の平安’を願ってこれを製作・奉納したものとわかる。そして明初・洪武期、その延長線上におかれるのが、雲龍文とともに象徴的な「春寿」銘が記された、これらの瓶なのではないかと推察される。

先述のように、元時代を通じて庇護され、江南道教の中心であった道教の正一派（正一教）の本拠地・龍虎山が、江西省貴溪にあるのをはじめとして、神霄道、淨明新道なども江西省のそれぞれ南豊、南昌西山を活躍の拠点としたことが知られている。また江南地区にはこのほか全真道、金丹派南宗の道士が多く活躍したという背景から³⁷⁾、景德鎮製品にこうした道教にかかわる器物が製作されるのは、当然ありえたことであった。そして元王朝に続く明の洪武年間においても、国家的な行事として、道教にかかわる宗教的儀礼のために、景德鎮磁器が製作され用いられたことは、十分考えられるのである。文様ひとつにしても厳しい統制の下に置かれていたこの時期、五爪の龍と「春寿」の語の組み合わせが出現したことは、皇帝、道教、景德鎮官窯の近い結びつき的一端を示しているであろう。

これまで元一明初洪武期の景德鎮製品と道教、もしくは他の宗教との関係については、あまり言及されることがなかった³⁸⁾。本稿では関連の一樣相を示すことができたに過ぎない。しかし、この時期のみならず、それ以後の景德鎮磁器の中にも、道教信仰にかかわる意味や意図を含んだ絵文様、文字が表されることは少なくない。今後も、‘宗教儀礼や信仰にかかわる景德鎮製品’という問題について、引き続き多くの作品資料をあたり、取り組んでゆきたいと考える。

《謝辞》 本稿を成すにあたり、岡山大学助教授の遊佐徹氏より文献資料において多大なご教示を得ました。また「春寿」瓶作品調査にあたっては、大阪市立東洋陶磁美術館の出川哲郎氏、グラスゴー美術館のニック・ピアース氏に大変お世話になりました。ここに記して感謝いたします。

注

- 1) 『上海博物館所蔵 青花磁器展』カタログ、朝日新聞社、1988年（解説執筆は上海博物館の汪慶正氏とみられる）。図版5に「青花雲龍文「春寿」瓶」を掲載し、その解説中に4点の伝世品があることと、そのうちの1点が中国個人所蔵であることを明記している。しかしその個人蔵作品は、図版などが一切公開されていない。
- 2) 管見の範囲では「春寿」の文字が記載されている作例は、ほかの景德鎮の元～明初の作例に見られない。また篆書体の文字を磁器に記すこと自体も、永楽年間（1403-24）に入ってからごく一部の青花、白磁において登場するようであり、その場合でも、「永楽年製」と年款銘を記す上質の作例が知られるのみである。）
- 3) 汪慶正「明景德鎮洪武瓷述略」『上海博物館集刊』第4期、上海古籍出版社、1987年、292-311頁。
- 4) Jean Gordon Lee, 'Some Pre-Ming "blue-and-white"; a stylistic analysis with suggested chronology' "Archives of the Chinese Art Society of America", Vol. IV, 1952, pp. 33-40.
- 5) John Alexander Pope, "Chinese Porcelains from the Ardebil Shrine" Freer Gallery of Art, 1956.
- 6) J. A. ポープ「元・明初の青花」『世界陶磁全集11 元明篇』河出書房、1955年、190-202頁。この論考は、アルデビル論文の抄訳ともいうが実際の発刊は一年遡る。本文中、ポープ氏はグラスゴー「春寿」瓶の図版（p. 196, Fig. 68）を引用しつつ「洪武の遺品」と述べているにもかかわらず、文中の挿図キャプションに「元末青花雲龍文梅瓶春壽銘」と明記されている。また、ポープ氏のいう洪武期の青花牡丹文玉壺春瓶（フィラデルフィア美術館蔵）の挿図図版も「元末明初青花牡丹文瓶」と表記されている。ポープ氏自身は、どの論文中（原典英文）にも「元末明初」に相当する語を用いていないので、これは当時、日本の編集者側（編集担当・藤岡了一）の見解によったものかとみられる。
- 7) 現在、大阪市立東洋陶磁美術館に所蔵されるこの瓶は、東畑謙三氏からの寄贈品であるが、それ以前は財団法人・静嘉堂（三菱財閥・岩崎コレクション）にあり、ホープ氏前掲注5の論文、80頁の注170の記載によれば、さらにその前は、中国の著名なコレクター・Wu Lai-hsi 氏の藏品であったという。
- 8) 藤岡了一「元・明初の染付」『陶器全集11 元・明初の染付』平凡社、1960年ではカラー図版4に「雲龍文春寿字の瓶 元末 静嘉堂」と載せ、本文の11頁ではそれを「元末明初」の作品としている。
- 9) 佐藤雅彦・中野徹『陶器講座7 中国Ⅲ 元・明』雄山閣、1971年、図版50。本文中にその解説等はない。
- 10) 矢部良明『陶磁体系41 元の染付』平凡社、1974年、107-9頁。
- 11) Rosemary Scott 'A Group of Early Blue and Red Decorated Wares from

- Jingdezhen in the Burrell Collection' "Scottish Art Review" vol. xvi, no1. 1984-5, Glasgow Art Gallery.
- 12) R. スコット氏が1984年の時点で行なった作品紹介では、静嘉堂に所蔵されている作品と認識されていた（注7参照）。
 - 13) 図版は姿・底裏ともにカラー写真で紹介されている。汪慶正主編『青花釉裏紅』上海博物館・岡木出版社、1987年。
 - 14) 汪慶正、前掲注3の論文。これに続き、1990年に発表された、陳克倫「景德鎮洪武青花瓷器考辨」『江西文物』1990-2でも、上海博物館の「春寿」瓶についてふれ、これを「洪武」としている。
 - 15) この作品を筆者は学芸員・出川哲朗氏の立会いで実見する機会を得た。図表1に用いた写真図版（裏面・蓋など）は、大阪市立東洋陶磁美術館の資料より借用させて頂いたものである。高知県出土遺品の報告は、江西省高知県博物館、劉裕黒、熊琳「江西高知県発現元青花釉裏紅等瓷器審蔵」『文物』1982-4、58-69頁。
 - 16) この瓶が最初に紹介されたのは、前掲注4の論文においてである。さらなる紹介は1984年、R. E. スコット氏により、パーレル・コレクションの中国青花・釉裏紅磁器の紹介記事によってなされている。Rosemary Scott 'A Group of Early Blue and Red Decorated Wares from Jingdezhen in the Burrell Collection' "Scottish Art Review" vol. xvi, no1. 1984-5, Glasgow Art Gallery. 筆者は1999年8月、グラスゴー大学教授 N. J. Pearce 氏の認可、立会にて「春寿」瓶の調査をさせて頂いた。
 - 17) この上海博物館の「春寿」瓶のみ、筆者はガラスケース越しでしか、作品を実見していない。底部の様子は図版写真を参考にしてほかに、『上海博物館展』図版 No. 112（作品解説は今井敦氏による）、東京国立博物館編集、1993年を参照した。
 - 18) 『上海博物館 中国・美の名宝③』（日本放送出版協会・上海人民美術出版社、1991年）の中で汪慶正氏によって提示された見解である。本器を「宮中で盛酒器として用いたのだろう」とし、加えて「春寿」の銘は宮殿名かもしれない」と推察している。
 - 19) 『佩文韻府』（清・康熙字典）卷五十五、上聲二十五有韻、春酒の項に記載。
 - 20) 『詩経』の詩文について、筆者はこれを国立台湾大学教授・謝明良氏からご教示いただいた。また大阪市立東洋陶磁美術館宛に中国江蘇省蘇州市の丁蘗氏（中国古陶器研究会会員）より送付された「春寿瓶考」と題した論考（1998年9月・第二稿、A4版2p、出版物ではない）中にも『詩経』詩文について同箇所引用があった。丁氏は、春寿瓶を「元時代中晩期」の製作としている。丁氏論考については大阪市立東洋陶磁美術館・出川哲朗氏よりご教示いただいた。
 - 21) 『方麓集』「祭祖樂章、初獻」（祖先を祭る樂章で、初めに献ずるもの）に「惟王氏有令人春寿勝養……」と記載。（『方麓集』明・王樵〈1521-99〉撰、卷十四。文淵閣版『四庫全書』、集部、別集類所収）

清朝初期の文献の中には、「春寿」が「春寿陽紅」という牡丹の一品種として記載されている例もある。(『本草乘雅半偈』清・盧子頤撰・順治4年(1647)刊。文淵閣版『四庫全書』、子部、醫家類、所収)

- 22) 胡孚琛主編『中華道教大辞典』中国社会科学出版社、1995年。王者悦主編『中国薬膳大辞典』大連出版社出版、1992年を参照。前著「春寿酒方」の項に『明万曆伝』に記載されるとある。『万氏家伝養生四要』には、この酒の作り方と効用(「陽精而能延寿、強陽道而得多男、黒須髯而不老、安神志以常清……」)を説明している。
- 23) 本章における道教事項の記述については以下、『道教事典』平河出版社、1994年、窪徳忠『モンゴル朝の道教と仏教』平河出版社、1992年、金正耀(監訳:宮沢正順、訳:清水浩子・伊藤丈)『中国の道教』平河出版社、1995年、野口鐵郎『講座道教 第2巻 道教の教団と儀礼』、雄山閣出版、2000年等を参照した。
- 24) 『皇帝の磁器—新発見の景德鎮官窯—』(カタログ)大阪市立東洋陶磁美術館編集、(勲)大阪市美術振興協会・出光美術館・MOA美術館発行、1995年。
- 25) 景德鎮における出土遺品を扱う場合、それらが当時何らかの事情で完成品にならなかった破棄品であることには注意する必要がある。五爪龍を表した遺品—景德鎮窯址からの出土資料—を「元」もしくは「洪武」と決定している根拠が、出土遺品の相対関係からで、層位の絶対年代からでないことも厳密な考察を困難にしている。
- 26) 南京博物院「南京明故宮出土洪武磁器」『文物』1976-8、71-77頁。
- 27) これら出土陶磁片の詳細は蘆山康彦氏によって詳しく紹介されている。『世界陶磁全集14 明』小学館、1976年、図版173-5、解説p.327および付属官報。このほか、梁白泉・張浦生・霍華『宋明遺萃』南京博物院・香港中文大学文物館、1996年の図版22、23および解説を参照。
- 28) 河南博物院ではこの瓶を元時代の製作としている。(『河南博物院 精品与陳列』図版78、大象出版社、2000年4月)この玉壺春瓶(高39.4cm、口径9.3cm)は、高台側面と口部内側にも絵付けが施されており、口縁内側には2朶、高台外周には5朶の雲文が、濃く黒みを帯びた青料で描かれている。透明釉はわずかに青みを帯びている。裾広がりの形式に作られた高台も、畳付部分以外は、内側も施釉されている。(『大黄河文明展』カタログ、日本経済新聞社、1998年、図版104に掲載)
- 29) 「大阪「春寿」瓶」の蓋側面には「八宝文」「暗八仙文」らしき文様が描かれているが、この文様は元様式の青花磁器に多く、洪武様式の作例にはまだ認められていない。しかし、道教儀式用の官窯製品とすれば、道教が受け入れられていた洪武期にも特別に描かれたことがありうると考える。
- 30) 景德鎮窯で「官窯」が何年に設置されたかについては諸説あるが、代表的なものに洪武2年(1369)説、洪武26年(1393)説、洪武35年(1402)説、宣徳元年(1426)説がある。近年の景德鎮官窯発掘調査の進展とあわせ、現在のところ最

も有力とみられているのは洪武2年説である。

- 31) 長谷川祥子「中国青花・釉裏紅磁器における「洪武様式」についての一考察」『成城文藝』137号、1991年12月、26-78頁。また洪武様式の副次的文様の統制については、長谷川祥子「明初「洪武様式」の青花・釉裏紅磁器の研究—遺品から推定される官窯設置年代—」『鹿島美術財団年報・第十六号別冊』、1999年11月、448-59頁、財団法人鹿島美術財団。
- 32) 枢府磁とは、元の最高軍事機関である枢府（枢密院）のために焼成された白磁であり、「枢」「府」の印花文字が皿などに表されているものを指して呼んだもの。文字が入ってなくても、それと似通った作風の卵白釉白磁は、通称「枢府手」と呼ばれる。青白磁の次に登場してくる白磁であるとも考えられている。
- 33) 江西省九江市、元・延祐6年（1319）年墓出土の「青花（鉄絵）牡丹唐草文瓶」は、肩に象や獅子頭部の装飾を付け、蓋が七重の塔に宝珠を載せる形式である。また江西省景德鎮市から出土した（後）至元戊寅年（1338）銘のある作例として知られる「青花釉裏紅四神文蓋付壺」および「青花釉裏紅（紅釉）樓閣」にしても、前者の壺は器面四方に四神が貼り付けられ、蓋には八宝が並び、中央はチベット仏教の宝塔を象った形に作られている。後者の樓閣は銘文を記した置物で、その楼には何人かの人物が配置されている。ともに釉裏紅、青花で賦彩され、ピーズ紐繫ぎ装飾を施した特異な精作であるが、釉下彩で記された銘文から奉納品であったことが知られる。以上2件はこの1338年前後に、本格的な青花磁器が景德鎮に出現しているか否かを占う、重要な作品資料である。
- 34) 彭祖は『列仙伝』に記載される長寿の仙人で、姓は錢、名は鏗。夏から殷末の大夫であり、導引行、気の法に熟達し、のちに昇天したとされる。
- 35) この釉裏紅玉壺春瓶は、『文物』1992-7「文博簡訊」95-96頁、温秋明「元釉裏紅人物盜瓶」において初めて紹介された。瓶の4面（4窓絵）の写真が掲載されているが、その意味解釈はなされず“彭祖焼香”を描く「人物故事図」と記されている。現在上海博物館における、この釉裏紅瓶の時代表記は「洪武」であるが、筆者は元時代の作例であると考ええる。
- 36) 本作品は『人民中国』1990-1、p. 66に初めて図版とともに紹介された。揚州博物館・揚州文物商店編『揚州古陶瓷』文物出版社、1996年、図版101には、元時代の「釉裏紅開光祈雨図罐」という名称で紹介されており、165頁の作品解説に各図の説明が詳細になされている。
- 37) 金正耀（監訳：宮沢正順、訳：清水浩子・伊藤文）『中国の道教』平河出版社、1995年。
- 38) 陶磁器におけるこの方面の研究は少ないながら、元時代の青花磁器をはじめ、工芸品における宗教神話的意匠について、通俗文学、歴史・民間故事まで含め考証された論考が、近年、陳階晋氏によって著されている。（「元代工芸に見る人物故事図」『世界美術大全集 東洋編7 元』小学館、1999年、352-60頁）

図版リスト

- 1-a 南京洪武宮址出土 青花印花雲龍文盤(陶磁片)南京博物院藏 底径10.5cm
(梁白泉・張浦生・霍華『朱明遺萃』南京博物院・香港中文大學文物館、1996年、
図23)
- b 南京洪武宮址出土 青花印花雲龍文盤(陶磁片)南京博物院藏 径5.4×5.6
cm (梁白泉・張浦生・霍華『朱明遺萃』南京博物院・香港中文大學文物館、1996
年、図24)
- 2 南京洪武宮址出土 紅彩雲龍文盤(陶磁片)南京博物院藏 復元口径15.6cm
(梁白泉・張浦生・霍華『朱明遺萃』南京博物院・香港中文大學文物館、1996年、
図22)
- 3 青花印花雲龍文盤 大英博物館藏 (Alfred Clark 氏寄贈) 口径15.9cm (弓場
紀知氏撮影)
- 4 青花波濤龍文瓶 アルデビル廟藏 高41.5cm (John Alexander Pope, "Chinese
Porcelains from the Ardebil Shrine" Freer Gallery of Art, 1956, pl. 50)
- 5 青花雲龍文玉壺春瓶 內蒙古翁牛特旗出土 北京歷史博物館藏 高29.8cm (筆
者撮影)
- 6 青花雲龍文玉壺春瓶 大英博物館藏 (Basil Gray 氏寄贈) 寸法不詳 (『龍泉集
芳』、繭山龍泉堂、1976年、図700)
- 7-a 青花雲龍文團基罐 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 高11.2cm
- b 青花雲龍文硯盒蓋片(半生品) 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 径
26.7cm (a-炎黃芸術館編『景德鎮出土元明官窯瓷器』文物出版社、1999年、図版
1。b-『景德鎮出土陶瓷』香港大學馮平山博物館、1992年、図版168)
- 8-a 青花雲龍文桶式蓋付罐 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 高22.8cm
- b 青花雲龍文硯盒蓋片(半生品) 1988年 景德鎮市珠山北麓風景路出土 径
19.9cm (a-炎黃芸術館編『景德鎮出土元明官窯瓷器』文物出版社、1999年、図版
4。b-『景德鎮出土陶瓷』香港大學馮平山博物館、1992年、図版169)
- 9 青花雲龍文象耳瓶 一對 英國・デビッド・ファンデーショ ン藏 高63.5cm
(デビッド・ファンデーショ ン繪葉書)
- 10 青花雲龍文玉壺春瓶 1958年 河南省滎陽市楚村、明代靜王墓出土 河南博物院
藏 高39.4cm (『大黃河文明展』、日本經濟新聞社、1998年、図版104)
- 11 釉裏紅松竹梅文蓋付梅瓶 江蘇省江寧縣孫家山、明宣德宋琥墓出土 南京博物院
藏 總高42.5cm (『南京博物院名寶展』名古屋市博物館・中日新聞社、1989年、図
版52)
- 12-a 釉裏紅人物文玉壺春瓶 上海博物館藏 高33cm (筆者撮影)
- b 同作品〈胸部の図〉(筆者撮影)
- 13 釉裏紅祈雨図壺 揚州文物商店藏 器高33.6cm、總高48.3cm (揚州博物館・揚
州文物商店編『揚州古陶瓷』文物出版社、1996年、図版101)